子どもたちの人権作文

じぶんの気持ち

菅尾小学校　6年　黒木（くろき）　りみ

私は二学期に、西光万吉さんの差別との出会いと立ち上がりについて書かれた「人の世に熱あれ、人間に光あれ」を学習しました。万吉さんは、すんでいる村のことで何度も差別を受けてきました。差別されるたびに逃げていましたが、「同じ人間なのに、どうしてこんな差別を受けるのか。」と悩み、間違った世の中を変えるために勉強して、村の仲間と協力して全国水平社を立ち上げたのがすごいと思いました。

私は、「人の世に熱あれ、人間に光あれ。」の「熱」とは「人の世の中に温かい心を」、「光」とは「すべての人間が平等に接すること」だと思いました。

でも、私は一学期に学習した「なこごて腹んたつ」の良子さんが、いじめるみんなの前で「私をバスケのチーム分けに入れなかったのはどうして？」「私は、もう差別されるのはいやです。」と言って立ち上がったのでもっとすごいと思います。理由は、万吉さんはみんなで協力して立ち上がったけど、良子さんはクラスのみんなに向かって一人で立ち上がったからです。良子さんは勇気があるなと思いました。もしかしたら、もう言いたくてたまらない気持ちになったのかなと思いました。

私は、クラスで発表するとき、少ない人数なのに、やっぱり緊張します。私だったら何も言えずに逃げてばっかりだろうなと思います。人には、

「はっきり言っちゃえばいいんだよ。」

などと言ってるけど、自分は言えないので、いつも友だちに、

「人ごとだと思っているんでしょ。」

と言われてしまいます。私は、そんな自分はよわむしだと思いました。

私はこれから、友だちに言ってばかりじゃなくて、自分も人前で意見を言えるようになりたいです。できれば、一人じゃなくて仲間といっしょに言えるようになりたいです。

東日本大震災に学ぶ

清和中学校　3年　大塚（おおつか）　邑玲（すみれ）

今年の三月、東北地方を中心に地震と津波による大きな災害がありました。死者、行方不明者は次の日、また次の日と増えていきました。八ヶ月近くたった今でも行方が分からない方々がたくさんいらっしゃいます。東北の町では、次第に元に戻ってきているところもありますが、復旧や復興にかなりの時間が必要なところがあるのも事実です。私たちは、九州という、東北からとても遠い所に住んでいて、地震の被害もなければ、津波の被害もありませんでした。死者・行方不明者がどんどん増えていくのをテレビのニュースを見ても、なんだか遠い所のような気がしていました。しかし、そんな中私の父と母は、ニュースを見るたびに目を赤くして、

「被災地の方々は、テレビも見れないし、新聞もないから、周りがどんな状況なのか分からないんだよ。食料もないし、ガスも電気も水道もない。そんな中で頑張っているんだから、すごいんだよ。」

と言いました。なぜ、父や母が目を赤くしてこんなことを言うのかというと、父と母は、私が生まれる前におこった『阪神淡路大震災』を経験していました。だから、その時のことを思い出して言ったのです。私は阪神淡路大震災のことを詳しく教えてもらいました。

震災が起こる前の夜は、姉を寝かしつけた後、父も母も普通に寝ました。真夜中に、すごい地ひびきと共に大きな縦ゆれが来ました。母は、急いで姉の寝ている小さなベッドにおおいかぶさり、父を呼びました。父は、ベッドの横の大きな洋服ダンスの下敷きになって動けなくなっていました。その後、しばらくして、父は、その洋服ダンスの下からどうにか抜け出しました。地震がおさまり、一度外に出てみました。しかし、外は夜。真っ暗で何も見えませんでした。だんだんと朝日がのぼり、近所の人たちと両親は、目の前の光景にただ言葉を失いました。目の前には、昨日まであった、たくさんのビルの姿はなく、ただのさら地になっていました。両親の住んでいたアパートは一階がなくなっている状態でした。すっかり日がのぼると、父と近所の人たちは、建物の下敷きになっている人たちを助けるために町中を歩き回りました。母は、まだ幼い姉を抱いて、アパートで待っていました。テレビも、ラジオも、携帯電話も使えない状態の中で、じっとしていることしかできませんでした。清和の祖母は、携帯電話がつながらなかったので、死んでしまったのかと心配していました。しばらくして、祖母と連絡が取れて、生きていることが確かめられました。その後、両親は、大阪の親戚の家にしばらく住むことになりました。しかし、とても肩身のせまい思いをしました。阪神淡路大震災の時も、たくさんの支援金が集まったそうですが、その支援金の多くが町の復興のために使われ、被災者にはまわってこなかったそうです。そんな時に私の命が母のからだの中に宿り、その後私が生まれたので、故郷の山に囲まれた緑豊かな清和の村（邑）を思って、「邑玲（すみれ）」という名前がつけられました。

そんな話しを父と母から私は聞いて、東北の人々の苦しさが、今までより少しだけ分かった気がしました。体験しないと、つらさや苦しさは分からないと思います。私も、ずっとどこかで他人事だと思っていたんだと気づきました。募金活動などの応援することも、とても大切だと思いました。しかし、私は、父と母の話を聞いて、「忘れてはいけないんだ。この苦しい時を忘れずに、助け合っていかないといけないんだ。」と思いました。東日本大震災から、八ヶ月近くの時間が過ぎ、テレビのニュースでも毎日見ていたものが、毎日ではなくなりました。募金活動なども増えたとは言えません。人々の頭の中から消えようとしているかもしれないこの震災を、私だけでも、だれか一人でも忘れなければ、被災地の方々は救われるかなと思いました。助けたいけど、直接私たちにできることは、ほとんどありません。だから、私たちは、今、ここに存在していることの喜びをかみしめ、一日一日を大切に生き、そして、東日本大震災のこと、この震災を通して学んだことや感じたことを忘れないようにしなければならないと思います。

人権を考える町民の集い

12月6日、千寿苑で「人権を考える町民の集い」が開催されました。集いでは、ここで紹介する人権作文の発表に続いて、人権講演会が行われました。

講演会では、大阪府高槻市人権まちづくり協会の岡本工介さんが、「虹をカタチに～ルーツをツールにして生きる～」と題して講演を行いました。

同和地区に生まれ育った岡本さんは、厳しい差別の現実から、生まれ故郷に対して否定的な考えを持っていました。しかし、祖父の死をきっかけに、自分のことを支え、受け止めてくれている地域の人の存在に気づき、故郷を誇りに思うようになりました。その後は、さらに多くの人とのつながりを求め、国内外各地を訪問。旅の中から、それぞれに違いを持った人たちが心からつながるという「夢」を持ち帰りました。講演では、その夢を森にたとえて、「さまざまな木々によって成り立つ森をみんなで育てましょう。」と訴えました。

講演する岡本工介さん